

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

「武内紹人教授」からTsugu への一条の糸

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 範彦, HAYASHI, Norihiko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2309

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「武内紹人教授」から Tsugu へ的一条の糸

林 範彦

2017年3月。筆者はこの月を恐れていた。武内紹人教授が神戸市外国語大学を定年で退職するのである。全く信じられないが、この事実を受け止めつつ、本学を代表（する立場になど本当はないのだが）して、筆者から武内先生に対して心からの感謝の言葉を贈りたい。

武内紹人教授は1951年7月に兵庫県に生まれる。浄土真宗の勸学寮頭にまでなられた武内紹晃先生（龍谷大学名誉教授）を父に持つ、由緒正しき御家柄である。幼少時より非凡であった武内紹人先生は甲陽学院を経て、1970年に京都大学文学部に進学する。当初は流行していたサル学などに強い関心を抱いたとのことだが、高名な霊長類学の教授たちの顔が猿に似てきていることを知り、サル学を諦め、言語学に転ずる。

京大言語学科では西夏語の解読や文字学で著名な西田龍雄教授の指導のもと、伸びやかにチベット語の研究を進められた。1978年に修士課程を終えられたのち、ネパールの難民キャンプなどでチベット語方言のフィールドワークを始められた。困難を極める言語調査の精度を上げるべく、アメリカ留学を決意される。日本学術振興会の奨学金を得て、アメリカ・ペンシルバニア大学言語学科に1年、インディアナ大学ウラル・アルタイ学科博士課程に3年留学される。

調査言語学の手法を学ぶはずの米国留学であったが、インディアナ大学で古代チベットの歴史を専攻していた Christopher Beckwith 教授と出会う。これがまさに大きな転機であったようである。武内先生はここで古チベット語の文献研究の重要性に気づく。

チベット語は7~8世紀から実に多くの史料が見つかる言語である。日本の文献研究者は仏典を多く取り扱っていたが、武内先生は口語的な表現が見つかりやすい世俗文書を中心に研究された。インディアナ大学の博士論文のテーマで、のちに大蔵出版から刊行される *Old Tibetan Contracts from Central Asia*（1995年新村出賞受賞）は当時の中央アジアの多民族に使用された契約文書の研究である。これはチベット語の歴史言語学的研究に重要な貢献をなすだけでなく、中央アジアの歴史研究を明るく照らすものである。2016年3月には中国語訳が出

版され、まさに不朽の名著として受け継がれる研究である。

米国留学から帰国後、近畿大学教養部に奉職し、最初は英語教員として時事英語を担当される。4年半の勤務を終えて、京都教育大学国文学科に1988年に転出される。この時は留学生用の日本語教育の講座なども担当される。この間、京都大学ではチベット語の非常勤講師を務められる。このころ、高橋慶治氏（現・愛知県立大学教授）と共同で、「チベット語文法」の教科書が作成された。これはのちに本学の研究叢書第57冊『チベット語文法研究』（2016年）の第3部に収められる。

1997年に本学に言語学・アジア言語学担当の教授として赴任して以来、20年間、武内先生は大学の学務的な仕事にも忙殺された。大学院運営委員長、学術推進部会長、国際交流センター長、学術担当理事（大学院研究科長）兼外国語研究所長を歴任された。本学の国際化にも尽力され、ブータン国立ブータン研究センターをはじめ、Ecole Pratique des Hautes Etudes、中国青海民族大学、スイスのベルン大学言語学科との学術交流協定は武内先生がいなければいずれもあり得ない話であった。一方で、この間の学術的成果も目覚ましく、大型科研の代表者として、古チベット語のデータベース（OTDO）の構築や大英図書館所蔵のチベット語断片などのカタログ作成、シャンシュン語の解読などを進められた。まさしく八面六臂のご活躍である。2009年には日本チベット学会、2011年に Himalayan Languages Symposium（日本で初めて開催）、2013年には日本言語学会第147回大会など国内外の大型学会も本学で主催された。さらに、ハーバード大学・Collège de France、Ecole Pratique des Hautes Etudesなどの世界のトップの学術機関から招待され客員教授をされる。学術方面でも役職が付され、国際チベット学会の Board Member（日本人で唯一）、日本チベット学会理事、日本言語学会の評議員・編集委員などを歴任されている。チベット史学の岩尾一史氏、彝語文献学の岩佐一枝氏やチベット文献学の西田愛氏（第一回日本学術振興会育志賞受賞）など優れた若手研究者も育てられた。武内紹人先生は真に国際的で異能の学者であり、神戸市外国語大学は武内先生を教員としてこられたことは幸運というほかない。

論文や研究成果だけから武内教授を知るものは世界中に多くいるが、そんな人たちは武内先生のことをとてつもない学者だと認識しているはずである。筆者がロンドンであった会議で、あるアメリカ人の研究者と談笑していた際、武内先生の話になった。彼は武内先生のことをこう語っている。「論文をたくさん読んでいたから、名前はよく知っていて、長い髭を生やした老教授であるとずっと思い込んでいた。ある時、他の学者と話していたら、『よっ』と声をかけた明るく元気な人がいた。誰かかと思っていたら、『あれが Tsugu だよ』とその場

にいた別の知り合いが教えてくれた。びっくりしたよ、あんなに気さくだとは。」

しかり。国際的には武内先生は Tsugu と（愛情を込めて）呼ばれている。武内先生はその恐るべき学問的業績と反比例(?)するように、気さくで優しく、誰とでも楽しく話のできる人なのである。このことが武内先生に対する敬愛の念をさらに膨らませるのである。

武内先生は学者にモテる。そして女性にはとりわけモテるのである。ときに、呼びかけを行うときなどは、国際的には姓ではなく、名前を用いるのが一般的だろう。Tsuguhito[tsugu'çito]の名前が長いから Tsugu[tsugu]と短く発音することは理解できる。一方で、日本語話者は通常苗字「たけうちせんせい[te'keut̚eis̚e:]」を呼称に用いる。しかし、日本語話者の(複数の)女性たちからは「つぐさん[tsugus̚ẽ]」「つぐ様[tsuguseme]」「つぐつぐ[tsugutsugu]」などと発音されていることを筆者は確認している。このように女性たちから「なれなれしい」「親しげな」呼び方がされる(許される)のも、武内先生が人格的に丸く穏やかで、周囲の人々を惹きつけるからであると思う。出会った者にだけわかる喜び。それが「武内紹人教授」から Tsugu へ的一条の糸なのである。

もう定年。しかし、まだ 65 歳。武内先生を知るものは「えー、そんな歳なの?」と驚く。気力も体力も壮健そのものである。この 4 月から日本チベット学会の会長にも就任される。大好物の(赤)ワインの摂取量も若い頃と同じ、否、ますます盛んとお見受けする。そんな武内先生が本学の専任教員でなくなるのは寂しく辛いのであるが、こちらはまだまだ武内先生から教えを請い続けたい。

武内紹人先生。神戸外大と言語学・チベット学の発展へのご貢献、心から感謝申し上げます。これからもお体に気を付けられて、ますますのご活躍をお祈りしております。そして今後とも私たちをどうか導いてくださいますように!